

# 香取遺産

## 新上川岸屋台考

vol.195

- ①背面の開口部をふさぐ  
「裏大板」と呼ばれる彫り物
- ②新上川岸 牛天神の山車



菅原伝授手習鑑の名場面を飾り物にした新上川岸町の牛天神の山車(写真②)。飾り物をのせる屋台の部分は、大正4年(1915)に再建されたもので、それ以前のもものは漆塗総彫物として江戸時代に作られたものといわれています。

屋台を飾る彫り物は、嘉永年間(1848~1854)に石川三之助と石川常次郎による「龍」と「獅子」、明治8年(1875)に岸上定吉と小松重太郎による「古今著聞集」や「平家物語」などから取材したものがあります。

なかでも、新上川岸町には「裏大板」(写真①)と呼ばれる、背面の開口部に装着する彫り物があります。佐原では唯一、同町だけが所有しています。普段のお祭りでは装着することが無かったため、その存在は知られていませんでした。保管箱には「松二鷹 裏大板 吉枚入」嘉永三庚戌稿(石川三之助作)「嘉永三年1850」の墨書が確認できます。歴史的にみると、祭り屋台は、囃子方の演奏する場所を幕や障子などで見えなくする特徴があります。佐原も同じで、正面は簾、側面は障子が入ります。「今は勾欄まではみ出して演奏しているが、昔はこの中で演奏していた」との話はよく聞きます。しかし、背面の開口部がどのようになっているのかは謎でした。裏大板の存在は、そのことを解決する貴重な資料といえるでしょう。

岡生涯学習課  
☎(50)1224